様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２８８３

研究課題名（和文）海外看護実習で求められる状況別英語表現の分析と学習者オートノミー教材の研究

研究課題名（英文）Analysis of English communication in overseas nursing practice and development of learner-centered educational materials

研究代表者
南部　みゆき（NAMBU, Miyuki）

宮崎大学・医学部・准教授

研究者番号：９０５５０４１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：宮崎大学医学部看護学科では、4年次の総合看護実習として、交換留学提携校であるタイ王国のプリンス・オブ・ソンクラ大学で3週間実習に取り組む選択制プログラムがある。大学における学生の看護英語教育は、研究者自身のような、一般英語教員が担うことが多い。しかし、英語教員は自身の研究専門分野を持つため、講義内容や方法論が現在の看護教育に求められていることに合致しない場合もあり、看護実習先で必ずしも学習した内容が実習内容と直結しているとは言えない状況にある。英語教員側も深く知っておくことが肝要であり、本研究により、発話データ収集の基本と今後の課題を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ASEAN諸国では母国語での看護教育教材が乏しいため、英語の教科書や教材を使用するという現状があり、日本語で看護学教育が完結している日本は一歩遅れていると言わざるを得ない。よって、この研究が学生への効果的な英語教育モデルの基礎材料となり、臨床現場での多様な患者に対して柔軟かつ適切な看護の提供が可能となることが見込まれる。国際社会において多様な価値観を共有・理解し、プロとしての高い職業意識と自信を持って看護分野で活躍する人材育成の教育プランの一例となる。

研究成果の概要（英文）：Nursing Department, Faculty of Medicine, University of Miyazaki provides an elective three-week practical nursing experience for its nursing students in their 4th year at Prince of Songkla University in Thailand. Therefore, it is indispensable for English teachers to get themselves familiarized with nursing communication by conducting on-site observing so they can get to adopt their teaching methods for the sake of students. The results of this study can hopefully be fundamental data to improve the current exchanging program.

研究分野：応用言語学

キーワード：海外看護実習　ESP教育　ENP教育

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

宮崎大学医学部看護学科では、4 年次の総合看護実習として、交換留学提携校であるタイ王国のプリンス・オブ・ソンクラ大学（以下 PSU）で 3 週間実習に取り組む選択制プログラムがあり、実習先で使用する言語は英語である。PSU での実習を希望する学生には、必修用件として 2 年次と 3 年次の 2 年間に渡り、看護英語の授業を受講して単位取得することを義務付けている。大学における学生の看護英語教育は、研究者自身のような、一般英語教員が担うことが多い。しかし、英語教員は自身の研究専門分野を持つため、講義内容や方法論が現在の看護教育に求められていることに合致しない場合もあり、看護実習先で必ずしも学習した内容が実習内容と直結しているとは言えない状況にあった。実際に学生が海外実習先で求められる英語コミュニケーション能力とはどのようなものか、そのためには何を学習内容として提供すれば良いか、英語教員側も深く知っておくことが肝要である。本研究に先立ち、看護実習で学生が作成する看護ケアプラン (Nursing Care Plan) の一助となるよう、英語圏の看護師の発話コーパスの研究を行ったことがある。看護英語教育上の参考となる発話の傾向は得られたものの、発話データが北米の看護師同士のデータであったことから、PSU 海外実習プログラムを経験する学生のために応用するには、その使用の限界を認めざるを得なかった。やはり、実際に PSU で実習を行う学生の発話の様子をつぶさに観察することでその実態を知り、その基礎データをもとに学生の自学習促進につながる教材作成の必要性を感じた。

２．研究の目的

本研究は、PSU で看護実習に臨む学生の英語コミュニケーション能力の向上を視野に、そのために必要な、実習場面で使用されている発話を基礎データとして収集することを目的としている。看護実習でのコミュニケーションの場は１）対患者、２）対スタッフの２つに大別できる。学生は１日の実習計画、ケアの根拠や技術の手順を指導教官（臨床指導看護師および看護教員）に説明できて初めて患者への看護が実践可能となる。当日のプランニングの説明、患者の情報の捉え方、患者の状態説明、ケアの種類など、しっかりと伝えることが求められる。海外で看護実習を行う学生は、これらを全て英語で行わなければならない。そのため、学生と指導教官とのコミュニケーション実態調査が、基礎データとなる。

３．研究の方法

（１）収録作業調査

収録方法としては、BNC の spoken part の収録法（Burnard and Aston, 1998）を参考にして、以下の二つの方法を混合して実施する。

① 個人密着法：海外看護実習生に参加する学生に収録機材等を一定期間（機材操作試用期間も含めて５週間程度）貸し出し、学生自身に収録してもらう方法である。本研究では学生がそれぞれ IC レコーダーと音声マイクを身につけ、休憩時間を除く実習時間中のすべての発話を録音する。IC レコーダ—のみでも学生本人の録音は可能であるが、指導教員や他の医療スタッフ、現地の看護学生の発話についても録音を可能にするため、マイクを装着する。3 週間の実習の音声データは、実習中の各週末に３回に渡ってデータ送付を依頼する。

② 特定場面法：研究代表者および研究分担者が可能な限り学生に帯同することで、１）学生が直面する看護実習について理解を深めるため、また、２）個人密着法では限界のある、ジェスチャーや表情といった準言語要素の記録をするための手法、として位置づける。すなわち、研究代表者および研究分担の役割は、学生の帯同および映像の記録である。個人密着法で生じる可能性のある収録トラブル（録音中の電池切れ、録音ボタン押し忘れ等）のバックアップ用としても、映像の記録は重要である。

（２）会話コーパス分析と教材作成

収集したデータは、コンコーダンスラインを一括表示する KWIC 検索、共起語リストの作成、n-gram による lexical bundle の検索、語彙リスト作成、特徴語の抽出などを行い、コーパス言語学の知見を活かしながら、数量的な分析を行う。本研究最終年年度には、データ分析の結果をもとに、海外実習に向けての実践的な英語習得の一助となるオンライン教材の作成を目指す。

４．研究成果

（１）看護学生の発話の特徴について

実際の発話収集は、研究開始当初の予定を変更し、倫理的な観点から特定場面法による参与観察となった。看護学生の発話は指導教官の質問に返答することが殆どであり、自ら意見を述べる、質問する、などの発話行為は限定的であった。また、

① “I”で始まる発話が目立つ、
② 相手に配慮した表現が可能となる法助動詞が適切に使用できない
③ 文と文をつなぐ transition （つなぎ言葉）習得における未熟さ

が目立った。

（２）個人研究の限界について

PSU で看護実習を行った学生による現地での英語の発話については、コーパス分析に耐えうる量が収集出来なかった。後述する 28,29 年度の渡航不可能な時期もあったのは確かであるが、1 つには、実際にどのような場面でどのような英語が求められるかについては、実習に参加する各学生の対話ログの収集を、かなりの時間をかけて行うことが必要だということである。今回は、個人研究であったため、非常に限定的な範囲でのデータ収集に止まるという現実があり、看護英語教育に十分応用可能なデータを得るためには、提携校における実習生の受入れ責任者を始めとする関連部署の担当者の理解と協力が欠かせない、と実感した。その上で、研究代表者と分担者で研究組織を結成し、学生の海外実習期間により多くの時間をかけて帯同し、録音・録画に必要なテクノロジーも併せて導入しながら、実践的かつ応用性の高い看護英語教育の提供を目指す必要性がある。また、研究期間の初年度と 2 年目においては、研究者自身の病等により、PSU への渡航を断念したことも、データ収集の障壁となったことは否めず、先に研究方法として述べた「個人密着法」に関して倫理的手続きを経た上での準備、が必要であった。

（３）文化と看護の関わり、を ENP 教育へ

PSU の看護学部は、「東洋の英知 (Eastern Wisdom) を融合させ、グローバリゼーションへ向かう」という学部構想を掲げており、国際標準で通用する自立した看護プロフェッショナルの育成のため、多様な文化に基づいた上で東洋の英知を取り入れることを教育ミッションの 1 つとして明記している。実際、看護と文化の関わりについて、学生が PSU での実習期間内で学び、感じ取る機会もある。渡航前にある程度、学生のレディネス形成をしておくことで「対患者」という視点や意識をより深化させることを目指すことが有益であると感じた。そこで、タイ文化と看護の関わりについて学べる機会を ENP (English for Nursing Purposes) 教育プログラムに取り入れることで実現につなげていく。

（４）PSU との国際共同研究に向けて

先の（１）、（２）で述べたとおり、今回の研究においては開始当初の予定を変更せざるを得ない事態が生じたが、共同研究につながる PSU 教員との繋がりが持てたことが、非常に有益であったと言える。特に、海外の看護学生受け入れに長年従事してこられた Urai Hatthakit 博士との親交は 10 年を超えるが、過去に本学に招聘して、タイでの看護実習を目指す学生向けに講義を依頼したこともあり、両校の相互交換留学プログラムを熟知している。今回 Hatthakit 博士からは、「将来的に、プリンス・オブ・ソンクラ大学の学生と宮崎大学の学生の、実習を通した文化理解に関する共同研究が出来るとよい」というオファーを受けている。文化理解という側面から Hatthakit 博士は強く興味を示しており、（３）で先述した「看護と文化」という側面から、今後の共同研究の展望が開けることが見込まれる。

（５）実習後の学生のフィードバック

以下に、研究期間の 2 年目に発行した報告書から、英語によるコミュニケーションについて学生が感じた箇所を抜粋して列挙する。報告の原文が英語のため、そのまま掲載する。

① The confidence that I have been learned English for three years to study nursing in Thailand made me positive and strong. During the practice, I could enjoy my Thai life and learn many things every day. And I could achieve my nursing and English skill goals. And for students who want to go PSU, keep your motivation, review ENP classes, and keep studying or using English every day even for just a bit. And for students who want to go PSU, keep your motivation, review ENP classes, and keep studying or using English every day even for just a bit.

②Before I went to PSU, I reviewed ENP class’s handouts and learn again the terminology related to my theme, maternal nursing. In addition, I’m not good at listening conversation in medical scenes, so I watched a medical subtitled TV drama in English almost every day. Learning the enjoyable way is also important to keep the studying. I’m sure that these things will leads to your confidence. I hope that your nursing training in PSU will go well.

③While living in these environment, I gradually became able to express my opinion with confidence. In order to establish communication, it is necessary both to receive the other’s message and to tell my message to others. Based on this learning in PSU, I want to continue to get involved with many people and train my communication skills.

④Sometime, I felt to give up to go to PSU and quit English class, because I’m not god at English. But, last day of PSU nursing practice, one PSU teacher said “Satomi, your English become fluently compared to when you come to Thailand”. I heard teacher saying I felt very happy, and I felt accomplishment. I feel I could make a progress through PSU nursing practice.

⑤Some nursing students said that “I’m not good at speaking English.”. But they tried hard to speak in English. So, I was impressed their attitude to try to express their thought in English. In Japan, we learn most diseases in Japanese in class, but PSU students usually learn a lot of medical words in English in class. So I thought I need to expose many medical English words regularly to improve amount of knowledge about English.

⑥My next goal is the improvement of my English skill to discuss about psychology and right of patients, nursing care and problems more deeply. I should train to use basic English more and learn technical English through my daily study about nursing care.

⑦All PSU students learn and use them in class and they got used to explain nursing diagnosis using by medical professional words of English. So they could explain many medical system of Thai land if I had many questions.

⑧While I went to Thailand and had many new experiences, I felt stronger that I wanted to improve my English ability and experience various cultures.

⑨I gained confidence in my English skill by talking a lot. I would like to put not only nursing and English skills but also all of things which I acquired in Thailand as my experienced in the future.

PSU に行った学生が、実習を終えてから「もっと～しておけば良かった」と実感するのは常である。研究最終年度の 2019 年に実施された、PSU 実習経験済みの 4 年生と 3 年生の交流会は、実習後の学生の声が次年度に実習を目指す学生に直接伝わり、大変有機的であった。以下は、その交流会のまとめ（永射紀子、『2018 年度 ENP 報告書』宮崎大学医学部社会医学講座英語分野、2019）をもとに、4 年生が実習後に感じた「しておけば良かった」（後輩へのアドバイスも含む）という感想を列挙したものである。

⑩ 日本の医療制度について説明できるようになっておくと良い。

⑪ 日本ではどんな感じ？というふうに聞かれることがあるため、特に自分の選択する領域の看護や制度については、少しでも英語で表現する練習をしておけば良かった。

⑫ 3 年生の実習を通して、PSU での専門領域、学びたいことをイメージし、早い段階で見当をつけるとよい。

⑬ 専門領域で使用する医療英語の学習が必要。用語を使ってコミュニケーションが取れる程度に。

⑭ 自分の意見や疑問を積極的に述べることが出来るとよい。質問の聞き方など基本的な表現を習得していくとよい。

⑮ PSU の学生と英語でコミュニケーションを取りながら遊びも楽しむことが、英語上達への一番の近道である。

⑯ 医療英語と一般的な英語を言い換えられるようになっておくと良い。

⑰ 現地での英語使用が一番トレーニングになる。準備も大事だが大きく構えるのも大事。

今回の 3 年間に渡る研究は、国内でもあまり類を見ない、海外協定大学との相互留学、それも看護実習という非常に専門性の高いプログラムの相互派遣に関して、学生の発話基礎データ収集を行うことであった。PSU 実習を希望する学生の数は、過去 3 年間、確実に伸びてきている。今後、実習プログラムが上手く機能するには、PSU の教員との密接な人間関係を築いていくこと、そして、学内の英語教員と看護教員の連携が活発になることであろう。先に述べたが、PSU との国際共同研究につながる活路も見つかったことは、今後、さらに PSU 実習プログラムの充実化が期待出来る。

＜引用文献＞

永射紀子、2018 年度 ENP 報告書、宮崎大学医学部社会医学講座英語分野、2018

横山彰三、Michael Guest、南部みゆき、永射紀子、EMP 教育の実践と研究 2018、宮崎大学医学部社会医学講座英語分野、2018

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 横山彰三、Michael Guest、南部みゆき、永射紀子、EMP 教育の実践と研究 2018、査読無、vol 1、宮崎大学医学部社会医学講座英語分野、2018、pp.116-117
② 横山彰三、Michael Guest、南部みゆき、永射紀子、2016 年度 EMP 報告書-EMP の研究と実践-、査読無、vol 1、宮崎大学医学部社会医学講座英語分野、2016、pp.127

〔学会発表〕（計 2 件）
① 南部みゆき、医学科の EMP 教育における映像メディアの活用：学年別ニーズを探る、映像メディア英語教育学会西日本支部研究大会、2019

② 南部みゆき、医療系メディアの活用で医学生のニーズに応える：解剖英語の学習を例に、映像メディア英語教育学会西日本支部研究大会、2019

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。